

旭川文学資料友の会

## 友の会通信 第31号

発行・NPO法人 旭川文学資料友の会  
 〒070-0044  
 旭川市常磐公園 旭川市常磐館内  
 電話 0166-22-3334  
 印刷・株式会社あいわブリント

## 令和五年度

## 定期総会を終えて

旭川文学資料館館長

三原 一仁

## 何が本物なのか

近ごろAIについての話題がにぎやかです。AIを人工知能(人工知能)と訳したのとはまずまずですか。一方でアナログとかデジタルとか、カタカナ言葉にはわかりやすい日本語はないのでしょうか。漢字文化圏の元祖隣国では、アナログは「模擬」、デジタルは「数字」と意識しています。してみると日本のデジタル庁は数字庁ですか、なんとも薄っぺらな感じがします。

アナログとかデジタルとかというのは、どういう意味かといえば、現に存在しているものにどのように向き合うかという向き合い方の違いのことなのです。モノをそのまま捉え

て表すことがアナログであり、それを微細に分割して数値化して表そうとすることをデジタル化というわけです。

自然界に存在するものはすべてアナログですし、自然の一部である人間ももちろん、そのものがアナログであってデジタルにはなり得ません。

デジタル化とはアナログ世界をいかに数値表現するかということにすぎなく、どちらが優れているかという優劣の問題ではありません。デジタルがアナログに取って代わるものではないのです。その意味では、アナログが「真正」であってデジタルの方が「模擬」ではないのかと思ってしまう。先の隣国の意訳も勇み足的な誤訳と言っていいかもしれませぬ。

視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚。人間の心は五感にもよるところが大きい。五感によって心情は動かされ、心情によって五感も感じもします。美術や音楽にこれらの要素がかわっているのはなんとなくわかります。では文学ではどうか。詩歌散文いずれも五感の表現なしにはあり得ないでしょう。

しかし、美術や音楽がほぼほぼ直接に感覚的であるのに対して、文学はなかなかそうでない。美術や音楽は、色や線あるいは音やリズムという感覚的なものを素材としています。

それに対して文学は、文字というあまり感覚的ではない素材を使った言語というものを手段としていますし、そのうえ文字言語には文法という一通りの理屈もあります。

デジタルの権化ともいえるべきコンピュータも、プログラム言語とよばれる種類の言語で動かされているのですが、そもそも言語というものはデジタルとは親和性が高いともいえます。

ところで、人の心情というのは理屈ではないですよ。だから場面によっては、(心に潜む倫理的な要請のもとで)オトナにならないければとなれば強迫観念に駆られるように感情を抑えて、理屈で考えようとするのも人間です。

文学は精神的な葛藤も表現しますが、その葛藤から思わずこぼれ出た理屈抜き的心情を、言語というなかなか理屈っぽい道具で表現しようとする時、そこには上手く表現しきれないもどかしさのためにさらに上塗りするような葛藤が生まれることはありませんか。

そういう意味で、文学は心情と論理つまりアナログとデジタルの葛藤そのものではないかと思うのです。

企画展

# 「小学校の校歌展 I」を終えて

二〇二三年一月十七日〜六月十日

沓澤 章 俊

中学校以降の校歌は憶えていなくても、小学校の校歌は憶えていて歌える方が多いので

はないでしょうか。わたしもその一人で、通っていた東町小学校の校歌は今でも歌えます。「朝あけの大雪山のおかるさにく」。

そのときは気に留めていなかったのですが、作詞は入江好之。旭川師範学校（現北海道教育大学旭川校）出身の詩人。在校中に詩誌「狼」等を発行し、小熊秀雄らから「狼連中」「狼グループ」と呼ばれていました。作曲は池内友次郎。有名な作曲家で俳人でもあります。

今回は第一段として作詞者八名と市内十八校の校歌を紹介しました。また、会期中の四月十五日（土）午後一時半から記念講演会を実施しました。講師は旭川在住の日本学術振興会特別研究員（PD）

で「校歌の誕生」（人文書院）の著者でもある須田珠生さん。演題は「校歌 その軌跡」。校歌の誕生から時代ごとの変遷を、画像と音源を交えて分かりやすく解説いただきました。校歌作成までの具体的な手続きなども説明され、三十名の参加者の中には、その意外な経緯に驚く方も少なくありませんでした。

市内の小学校には、全国的に著名な詩人や歌人が作詞した校歌や、逆に、全国・地方の文学史に記述のない人物が作詞した校歌も多数あります。

第二段として、来年の始めから企画展「小学校の校歌展 II」を開催します。

校歌の資料などお持ちの方は事務局までご連絡いただければ幸いです。

北海道新聞 掲載記事 2023年2月3日（金）朝刊

## 校歌から地元の魅力再発見

もうすぐ卒業式シーズン。学校の節目の行事に欠かせないのが校歌だ。旭川文学資料館（常磐公園の市常盤館内）では企画展「小学校の校歌展」が開かれており、市内小学校の校歌が資料約250点が展示されている。歌詞に注目すると、地元ゆかりの詩人・歌人のほか、著名な作家も作詞に名を連ねている。資料館を通じて地元の文学や自然の魅力を再発見する機会になれば」と来館を呼びかけている。（小林史明）

### 旭川文学資料館で企画展

「朝日に光る大雪山 飛 安定開育ち」が作詞した東んでいくあの雲のまにに」。栄小校歌の歌い出した。詩人の小野寺与吉「愛別町



学校に勤めながら文章誌を創刊した。登山が趣味で、歌詞に大雪山系の山が多く登場する。愛宕東小の校歌では「峰々が寄りそって大きな山になるように」を合わせて育つという」と、児童の成長を山に例えて願っている。

文学資料館の常設展で

### ゆかりの詩人ら作詞 大町桂月、勝承夫も

「小学校の校歌展」を開催中の旭川文学資料館。歌詞や作詞者の著作など約250点が見られる



は、旭川ゆかりの作家を紹介してきた。だが市民からは「関心を抱きにくい」と言われることもあるという。そこで、年代を問わず関心の高い校歌を初めに紹介した。旭川ゆかりの詩人・歌人のほか、著名な作家も作詞に名を連ねている。資料館を通じて地元の文学や自然の魅力を再発見する機会になれば」と来館を呼びかけている。（小林史明）

に在籍した軍人歌人、斎藤 路一とよる声ノ湖畔に。北嶺小の旧校歌は、道大に在籍した軍人らに身を練り鍛え上げた。歌人の小野寺与吉が書いた。元高松師範学校教諭の三原一仁（原長）は「みんなが知っている校歌が、郷土の文学を知る足がかりになればうれしい。閉校した学校や、戦時中に道内の教員が治安維持法違反容疑で逮捕された北海道級方教育連盟事件の関係者が作詞した校歌も紹介したので、資料館が命をかけたことでも有名だ。大雪山開拓公園パークボランティア連絡会の黒田 忠会長は「桂月が書いた紀行文で大雪山の名を全国に知らしめた。当時の著作や新聞記事など、当時の展示資料も見たい」と話す。

東洋大理事長や日本音楽著作権協会会長を務めた詩人勝承夫は、正和や大町小など各校で作詞。勝はドイツ民謡「小ぎつね」に日本語詞をつけ、箱根駅伝の往



講演する須田珠生さん



## ミニ展示

## 「旭川の芥川龍之介展」から

(二〇二三年十一月一日)

二〇二三年三月三十一日



芥川龍之介が亡くなる二か月前に、旭川で里見弴と共に講演していたことを知らない方も多いのではないだろうか。

今回、俳人で予備校講師の松王かをりさんの評論によって詳しい旅程が分かり、講演旅行の行程マップを作成、また、当館所蔵の芥川関連の資料、たとえば、芥川の講演を旭川で聴いた小熊秀雄や、小樽で聴いた伊藤整、小林多喜二の資料、講演旅行のきっかけとなった改造社版『現代日本文学全集』、旭川市中央図書館所蔵「旭川新聞」掲載の芥川に関する記事(コピー)等々を展示することができました。あらためて感謝申し上げます。教科書に必ず登場する芥川龍之介、その人

と作品をより親しんでいただくよい機会になりました。

## 記念講演会を終えて

松王かをり

旭川文学資料館の学芸員である沓澤章俊さんから最初にメールをいただいたのが、去年(二〇二二年)の十月十八日である。旭川の俳句結社「雪華」の主宰である橋本喜夫さんからの紹介だとおっしゃって、俳誌『雪華』(二〇一八年八月号)に寄稿した私の評論「龍之介句を読む―最後の講演旅行から絶筆へ」を読んだの依頼だと丁寧にお書きくださった。その評論を書く折、私は、芥川が旭川を訪れた昭和二年五月十九日前後の『旭川新聞』の記事を調べたくて、旭川市中央図書館に行き、司書の方がとても親切に対応してくださり、マイクロフィルムで、旭川新聞社文芸部の熱い思いがこもった記事を読んだ。それから思い出し、その図書館のすぐ近くに文学資料館があることもわかり、記念講演の依頼をお引き受けした。

そのメールからしばらくして、芥川龍之介展のフライヤーが送られてきた。「死の二か月前、彼は旭川にいた!」、とてもキャッチー

なフレーズの素敵なフライヤーだった。これに相応しい講演をしなければと、少しプレッシャーを感じつつ、会場の下見も兼ねて資料館を訪れた私に、沓澤さんは、企画展の展示、さらには芥川が講演した錦座のあったあたり(二条十五丁目)も案内してくださった。

こうして迎えた三月十一日は、コロナ禍も下火となり、たくさんの方がお越しくださいました。芥川ファンの方、俳句関係の方、みなさんとても熱心に講演を聴いてくださり、気持ちよく講演をすることができた。これも、文学資料館やスタッフの方々のお蔭と、深く感謝している。講演の後、聴いてくださった方から、メールやお手紙、お葉書をいただいたことも、予想外の嬉しいことだった。

講演の翌日、旭橋の上で、この町で少女時代を過ごした齋藤史の歌を思い出していた。

落日の石狩川は燃えながら少女のわれの中を流れき 齋藤史

夕暮れの旭川の街はとても美しく、「旭川ゆかりの文学者」のコーナーに展示してあった、娘時代の可憐な齋藤史の面影が、川面にちらちら揺れていた。



講演する松王かをりさん

## 開催中の企画展示紹介

## 第二十六回旭川文学資料展

## 「山岳文学の系譜

— 相川正義所蔵資料を中心として —

(二〇二三年七月十一日〜十一月四日)



旭川文学資料館の書棚には、無造作にすぎない本が置いてあると思えました。なかでも山岳関係の書籍で限定本と呼ばれる書籍が書棚にたくさん並んでいました。その本の寄贈者を確認するとほとんどは相川正義となっています。いつかこの本を旭川市民の皆様に見ていただきたいとずっと思っていました。文学資料館の企画展では、旭川ゆかりの作家を取り上げることが通例となっており、なかなか機会がありませんでしたが、昨年山岳文学を



八名の作家(登山家)を展示した会場  
メガセントラリアル旭川店1階市情報センターでも  
ダイジェスト出張展示をしました

取り上げようとなった時にやはり一番紹介したいのは相川正義氏の寄贈本でした。この企画展の表題は最初「北の山岳文学」でした。しかし、企画展の準備を進める中で相川正義の経歴とか著作物、交友関係を調べていく内にそれは北海道で山岳文学が形成されていく過程において大きなつながりとなっていることが分かったのです。そのことから企画展の表題も「山岳文学の系譜」としました。

取り上げる作家については、大町桂月、小泉秀雄、清水敏一、大島亮吉、伊藤秀五郎、坂本直行、相川正義、加納一郎としました。黎明期の北海道の山岳については北大スキー

部の存在が大きく、初期の北海道の山には、登山道がほとんどなく、そのような山には、沢を詰め、藪を漕いで山頂に立つという、困難を極める山が多かったのですが、冬季、スキーを使った登山ではその困難さが緩和されることから、北大スキー部の部員が、北海道の山の冬期初登頂という偉業を次々と成し遂げて行ったのです。北大スキー部から一九二六(大正十五)年に北大山岳部を創設、初代部長は伊藤秀五郎が就任しました。スキー部が中心となって発行した雑誌「山とスキー」には慶應義塾大学山岳部の中心として活躍した大島亮吉も数多く寄稿しています。小泉秀雄が日本山岳会の機関誌「山岳」に一九一七(大正六)年掲載の「大雪山登山記」、一九一八(大正七)年掲載の「北海道中央高地の地学的研究」を発表、小泉秀雄の案内人を務めた成田嘉助を紹介してもらい、大島亮吉も北海道の夏の山を二度訪れ、大雪山関係の紀行文「石狩岳より石狩川に沿って」「北海道の夏の山」などを残しています。伊藤秀五郎の名著「北の山」の巻頭には一九二八(昭和三)年三月前穂高岳北尾根で滑落死した大島亮吉へ「私の最も敬愛する山の友 故大島亮吉君の霊に捧ぐ」と記載されています。本書の装丁や挿絵などは坂本直行が担当しています。

また相川正義、外山卯三郎、伊藤秀五郎、伊藤義輝、服部光平、宮井海平、宮沢孝、斉藤護国の八人で札幌詩學協会を創立、詩と版画の同人誌『さとぼろ』を発行しています。大

雪山研究のパイオニアとしての小泉秀雄の業績を掘り起こし、大雪山に関わった先人たちの業績に光を当てた著作は高く評価されるということなどで東川町在住の山岳史家清水敏一氏の著作についても紹介することになりました。清水敏一氏は残念ながら本年三月六日に逝去されました。七月十一日から東川町大雪山アーカイブスにおいて清水敏一氏の業績を紹介する企画展が開催されていますが、当館の企画展「山岳文学の系譜」も同じ日からの開催となりましたのは、何か不思議な縁を感じました。

(旭川文学資料友の会理事 黒田 忠)

ミニ企画展

旭川文芸の素描

デッサン

旭川在住の漫画家日野あかねが  
イラストで描く旭川文芸の一断面

(二〇二三年八月八日〜九月三十日)



日野あかねさん



ミニ展示室にて、旭川在住の漫画家 日野あかねさんが描く、旭川の文学者たちの素描展を開催しています。

一九二七(昭和二)年創刊の詩誌『えんとうぼう円筒帽』

同人だった小熊秀雄、今野大力、鈴木政輝、

小池栄寿よしひさ。一九二六(大正十五)年に結成さ

れた短歌会「旭川歌話会」で小熊秀雄と共に

メンバーだった齋藤史。旭川に十数年在住し

ていた、アイヌ神謡集の編訳者 知里幸恵。

『現代日本文学全集』(改造社) 販売促進の一

環として、里見淳と共に講演旅行で旭川に来た芥川龍之介。これら七人の色彩ゆたかな素描と、日野さんの著書、また、ラフスケッチ、下書原稿、色付け作業など作成過程がわかるような資料を展示しています。

日野あかねさんは、鷹栖町生まれ。十七歳で集英社からデビュー。同時期に正看護師免許を取得。少女漫画、ミステリー漫画を中心に描きながら、七年間病院に勤務しますが退職して上京。秋田書店、小学館、学研、読売新聞、医学芸術社などでギャグ及びショート漫画を連載。

一度は体調を崩し、第一線から退いたが、結婚後、夫のガン闘病が転機になり、家族ものの感動系の話、サスペンス漫画を描きます。

二〇一二年、漫画『のほほん亭主、がんばる』(ぶんか社)、二〇一四年、漫画『犬往生 老犬と過ごした21年間』(双葉社)を刊行。

二〇二二年から、詩人小熊秀雄の存在に感銘を受け、市内のブックマークカフェ(フィール旭川四階)や、旭川市中央図書館で作品展を開催。今年、漫画『詩人小熊秀雄物語』を刊行しました。

今回の作品展も、すでに、ウェブ版を含め各報道機関で紹介いただいております。是非お越しください。



## エッセイ

## 山と音楽

久末 眞紀子

山に音楽はよく合う。大地の息吹そのものが音を奏でるからだろう。人間を含めた全ての動植物は、大地のリズムに合わせ生命を紡ぎ、繰り返すことで子孫を残していく。銀河系の片隅で、青い地球の生命体は淡々とそれぞれの物語を紡ぐ。それは壮大な宇宙のシンフォニーといえよう。

街中の喧騒を離れ山歩きをしていると、五感が刺激され言いようのない喜びを感じる。風の音を聞き、鳥の囀りに耳を傾け、雨の匂いや触れたハイマツから立ち上る匂いに包まれると、生きていることの実感が得られるのだ。

太陽が東から西に沈むように、鳥たちは暗闇の中で夜明けを知り、囀りを始め、さんざめく光を浴びて大合唱となる。稜線に横たわると、風は谷から這い上り、樹々の梢を捉え、騒めきながら耳元で拡散してゆく。『全て世は事もなし』とは誰の言葉だったか。

二〇〇四年のエベレスト登山にはクラシック音楽の他にジャズやボサノバなどを持参し



た。高所順応の時に、その日の気分に合わせて聴いているのだけれど、寝付く時に聴くのは決まって古いジャズボーカルだった。厳しい自然の中にいると、人の声が恋しいのだ。

チベットサイド、標高六二〇〇mのハイキャンプは七二〇〇mのノースコルの下に位置する。ロンブク氷河を渡ってきた強風は一気にノースコルを超え、狼のような雄叫びと共にテント村を襲う。夜が明けると、キツチンテントは引き裂かれ、個人テントの風除けに積み上げた石垣も全て消えていた。この強風を「チヨモランマ・ウルフ」と呼んでいた。

「山が好きなら山で死ぬのは本望だろう」とは、よく言われる言葉だけれど、エベレスト下山中に、酸素ボンベが開かないトラブルに見舞われ「こんなところでは死にたくない!」と切に思った。尊敬する登山家の山野井泰史さんがヒマラヤのガジュンカン下山中に雪崩に合い、「人の声がするところで死にたい」と

必死の下山を試み、手足の指を犠牲に命を得た。厳しい自然の中で人の声は甘く温かい。

エベレストで登山料とキツチンテントをシェアした河野千鶴子さんは、二〇一三年、ダウラギリ1峰でシエルパと共に遭難死した。カトマンズで開かれたエベレスト五十周年記念登山で知り合い、チヨ・オユー(八二〇一m)に誘われたが、母が亡くなったばかりで参加できず、翌春にエベレストを計画し、共に世界の頂点に立った。彼女はその後八〇〇〇峰に挑み続け、五座の登頂を果たしている。遺体は今も七七〇〇m地点に残されたままである。

神々しい白い峰々は人間を魅了する。登頂できたのは、想像を絶する厳しい自然のふところに招かれ、許された奇跡のような一瞬の出来事だったと思う。

久末 眞紀子(ひさすえ まきこ)

北海道生まれ。札幌市在住。北海学園大学文学部英米文化学科卒業。一九八二年より(財)北海道埋蔵文化財センターに臨時職員として勤務。職場の同僚に誘われ初めて大雪山系の山に登る。その後、キリマンジャロ登山をきっかけに、マッキンリ、エベレストなど七大陸最高峰登頂に成功。日本人女性三人目のセブンサミッターとなる。二〇一〇年〜一六年、タイのラチャバット大学で日本語教師。二〇二〇年、大谷大学油彩科卒業。著書に『世界のてっぺんに立った! 熟年女性七大陸最高峰制す』(北海道新聞社刊)。

## 会員さんのページ

### 故郷のこと

鳥見 真生 (翻訳家)

私が生まれて、高校卒業まで住んでいた故郷は旭川だ。

約六〇年前、三歳ほどの頃、父に連れられて旭橋のたもとまで下り、石狩川で水遊びをしたことをまだ覚えてる。川は澄んでいて、水はとても冷たかった。かつて旭橋の下には石原が広がり、旭川の夏は寒く短かった。

やがて私は字を知らないのに、父の手帳に小さな丸をびっしり書き並べ、あるいはお医者さんごっこでお医者役になっても、カルテを書けない自分に腹を立てて泣き出すような子どもになった。しかし、読書は時間とお金のむだと親が考えていたので、一冊の本も買ってもらえず、小学生になると、学校の図書室や友達から本を借り、道端で雑誌を拾い、当時たいていの家に付いていた石炭小屋でこっそり読みふけり、時々登校するのを忘れた。

結局私の本好きは放任されるようになった。一九七〇年代半ばの東高時代の放課後には、平日でも人でにぎわう買い物公園沿いに

あつた富貴堂、マルカツのブックス平和、レコードの玉光堂を回り、建て替え前の市立図書館までよく歩いたものだ。旧図書館には、高校の図書室にはない一般書や新刊本があふれていて、私は借りたばかりの本に没頭し、幾度も自分の下りるバス停を乗り越した。

またそこには、私にとって特別な本があつた。荒地出版社の『サリンジャー選集』全4巻と別巻1だ。世界的ベストセラー『ライ麦畑でつかまえて』の原案のような掌編も含まれていた。私は文字、特に英語への興味からロック音楽を聴くようになり、英米文化に強烈に惹かれていた。しかし、米国人文学者サリンジャーの思想も文章も、難解すぎてなかなか読みこなせず、貸出しを繰り返した。窓際の青さび色のスチール棚に並んでいた函入りのその五冊は、摺りガラス越しの光を受けて淡く発光して見えたものだ。

時は流れ、石炭小屋も街角の書店も荒地出版社もなく、旭橋付近は大規模に護岸された。実家の両親は存命だが、代々の墓は墓じまいにするとのことで、札幌に住む私が旭川を訪ねる用事はいづれなくなるだろう。

ところが昨夏、かつてプラネタリウムを見た旧青少年科学館にある旭川文学資料館にお邪魔する機会を得た。拡大展示となった企画展「旭川の文学者たち」をメガセントアートルで見た後、そこで買ったお弁当を手に常磐公園のベンチに座った。とたんに、既視感に包まれた。前にもこんなことがあつた

のでは……。眼前に広がる池はよく知っている。確かボートに乗れて、噴水もあつたはず……。

すると、どこからかボートが漕ぎ出してきて、噴水がシューツと上がった。ああ、そうだった、と私はうれしくなった。高校時代、母が持たせてくれたお握りを図書館内の人前で食べるのが恥ずかしくて、私は公園のベンチで食べていたのだ。

AIの進歩で、翻訳業はまもなく消滅するだろう。それでも、故郷で見つけた好きなことを仕事にできて幸運だ、と心から感じている。



鳥見 真生 (とりみ まさお)

英米文学翻訳家。一九六〇年旭川市生まれ。旭川東高等学校を経て東北大学法学部卒業。訳書に『丙午の女』(柏艸舎)、『リングサイド』(早川書房)、『神々の捏造』(東京書籍)、『オリバー・ストーンの語られなかったアメリカ史1〜3』、『若い読者のための「種の起源」』(いずれもあすなろ書房)、共著に『BOOKMARK』(CCCメディアハウス)など多数。

# 資料館だより

## 受贈資料 (敬称略)

(1101111・四〜1101111・八)

- ・平田 理摩 司野道輔旧蔵資料多数
- ・松王かをり 『最果ての向日葵 俳人 藤谷和子に聞く』
- ・岡田 勝美 『戦中戦後 二人それぞれの 思い出』河合慶子 岡田勝美 思出・記録集 第三巻 石川啄木歌集『一握の砂』(復刻版)他
- ・柳澤 明 齋藤史短冊、『齋藤茂吉全集』、歌誌「短歌人」他
- ・飯田ひさ子 日野あかね『漫画 詩人小熊秀雄物語』



漫画 詩人小熊秀雄物語 発行あいわプリント

- ・為井 恵子 文芸誌「文芸美瑛」創刊号
- ・森田 庄一 更科源蔵豆本『シベリアの旅』
- ・塚田 千束 塚田千束歌集『アスパラと潮騒』
- ・鎌田 尚美 鎌田尚美直筆原稿「肉声」(小熊秀雄賞受賞詩集 鎌田尚美『持ち重り』 収載作品)、同草稿他

- ・野呂 春樹 三木澄子『純愛』(旭川が舞台) 学校教科書(小学校各科)他
- ・藤田佐智子 藤田旭山色紙
- ・茅森 千絵 旭川市内中学校生徒会誌他
- ・増茂 薫 当麻町小学校記念誌他
- ・増茂 恭子 アンソロジー『Poems For When You Can't Find The Words』(津川エリコ詩作品 [Mother Moon] 収載)
- ・津川エリコ 岡和田晃訳『モンセギュール 1244』(アナログ ロールプレイングゲーム)他

- ・岡和田 晃 『無国籍の在日サムムを生きる』とは『丁章さん講演録』
- ・丁 章 その他、各地文学館、記念館館報、各地文芸誌、歌誌、俳誌、詩誌等たくさんの御寄贈を賜りました。心よりお礼申し上げます。

### 記載内容の訂正とお詫び

本通信二十八号、三十号の掲載内容に誤りがございました。謹んでお詫び申し上げますとともに、左記のとおり訂正させていただきます。

- ・第二十八号 八頁 受贈資料 (誤) 柴田望詩集『壁/盾/ドライブ/海岸線』
- (正) 柴田望詩集『壁/楯/ドライブ/海岸線』
- ・第三十号 五頁 下段 (誤) 記念詩等の資料
- (正) 記念誌等の資料
- ・第三十号 七頁 次年度事業計画・企画展案 (誤) セブンリミッター(七大陸最高峰登頂者)
- (正) セブンリミッター(七大陸最高峰登頂者)

### 友の会人事動向 (敬称略)

#### 【新入会員】

- 柳澤 明、松平多美子、海老子川雄介
- 増田 周子

#### 【現在会員数】(八月末現在)

一七六名(うち法人九件)

### 編集後記

「お盆が過ぎたら旭川の夏は終わる」と、長い間思ってきましたが、今年の夏はこの「常識」を大きく覆し、連日の猛暑日が続いています。

ここ資料館はコンクリート造りで、夏は涼しく快適なはずでしたが、すっかり熱がこもってしまったようです。寒い冬はゆっくり来てほしいですが、そろそろ平年並みにと願うこの頃です。

さて、コロナの分類が変更され、資料館では企画展に、講演会に多くの方々にお集まりいただき、日常のありがたさを感じているところです。第二十六回企画展が始まり、ミニ展示室におきましても様々な企画展示を行っております。

本通信発行の頃には暑さもひと段落していることと思います。初秋の常磐公園散策を兼ね是非当館にお立ち寄りください。(ま)